
ショートストーリーシリーズ - 開かずの間 -

瑞希 祐作

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ショートストーリーシリーズ - 開かずの間-

【Nコード】

N2068G

【作者名】

瑞希 祐作

【あらすじ】

転校初日、僕は友達に学校を案内してもらった。そこには開かずの間があつて……。

お弁当の時間が終わり、少し時間があつたので友達のもとみち君が学校を案内してくれると言った。僕はそれに「うん。」とうなづき、ついていった。今日は米国の学校での最初の日。かなり緊張していたせいか、授業もあまりわからなかったし、ご飯も食べられなかった。でも、仲良くしてくれそうな友達がいたので、少しほっとした。

最初は図書室、他の学年の教室、理科室、音楽室など、いろいろと見せてくれた。わかつてくると次第に余裕が出て、終わるころには彼とも十分に仲良くなっていた。

ふと、彼はとある部屋の前で止まった。

「いい、この部屋は絶対近づかないほうがいいよ。『開かずの間』って呼ばれているんだ。」彼は真顔で言った。

「そんなに怖いところなの？」

「うん。開いているところを見たことはないし、たまに変な声が聞こえてくるんだ……。」

「変な声って？　こんな声？」と私は、その部屋からもれ聞こえてくるような音を指差しながら答えた。

「え……、本当だ。何かいるんだ……。お化け？」びっくりしたように彼は言った。震えているくせに怖いものみたさ半分で、「開けてみようか？」と急に言い出した。

「開かずの間でしょ？　怖いよ、何が出てくるかわからないし……。」「そう僕は言った。でもその時は既に遅く、彼は既にノブに手をかけてぐつと扉を引いていた。

扉は「ぎぎっ」と変な古い木を引き裂くような音を立てて、重く開いた。その瞬間我々の目の前には、気持ちの悪い長い黒髪の女性らしき人が立ちすくんでいた。

「あかんどー、お弁当するの……。」「と彼女が低い声でしゃ

べった。僕たちは「ぎゃーっ！」と声を立てて逃げ出した。

数日後、校長先生に呼び出されて僕たちは事実を知った。その部屋は『開かずの間』ではなく物置小屋で、彼女は先生に頼まれて片づけをしていた事務の人だったのだ。ただ、何かの弾みでドアが開かなくて困っていたのだ。

「I can't do open it still now

…」それが彼女の最後の言葉だったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2068g/>

ショートストーリーシリーズ - 開かずの間-

2010年11月11日08時33分発行